静岡発 こう読む

▶▶▶加藤裕治

# 戦後75年が経過して

浜松の戦災死者を追悼する慰霊祭が、例年より一カ月遅れの今月十八日に開催されたという。本紙記事を読むと、取材された方々の年齢は八十歳以上。終戦から七十五年。長い年月が過ぎている。

「降る雪や　明治は遠くなりにけり」。中村草田男による昭和六年の作品。つまり明治が終わってから約二十年後である。

この句は、街の景観といった、目に見えるものの変化を指摘しただけではないだろう。おそらくその時代を生きていた人々が感じていた空気感や雰囲気、それらが失われてしまったことを詠んでいる。元号が変わり急に明治がなくなるわけではない。だが二十年で、その時を生きていたという実感は遠くなってしまうのだ。

つまり二十年も経てば、リアルに体験していた感触も薄らいでしまう。だからこそ過去の重大な出来事は、社会全体で語り続けていくことが必要だ。来月、八月十五日の終戦記念日もそういうものである。

しかし、注意すべき点もある。『八月十五日の神話　終戦記念日のメディア学』（佐藤卓己著・ちくま新書）によれば、八月十五日が終戦記念日となった法的根拠は、一九六三年、第二次池田勇人内閣での閣議決定であった。佐藤も指摘するように、八月十五日が終戦記念日として確定したこと自体、戦後から約二十年が経過し、戦争が遠くなったことの産物だった。人によって異なる多様な戦争の経験を、一つにまとめようとする力が働き始めたのだ。

だがさらにいえば、この佐藤の著作自体が戦後六十年の二〇〇五年出版。まだ八月十五日のあり方を問える時代だった。しかし今や、八月十五日が何の日なのかすら危うくなっている。だから繰り返しこの日が終戦記念日であり、そこで戦争を語り、考え続けることが必要だと思う。

私の趣味は映画だが、浜松のシネマイーラでも、戦後七十五年企画上映を行うという。作品は「黒い雨」「ひろしま」「野火」等。コロナ禍で劇場も厳しい状況と聞くが、戦争を考える試みの一つとして応援したい。

（静岡文化芸術大学教授）

2020.7.26
中日新聞（朝刊）P.14